

## 『歴代寶案』校訂本第十一冊の刊行に際して

沖縄県教育委員会教育長 嘉陽 正幸

我が沖縄県は、他県に例を見ない独自の变化に富んだ歴史を歩んできました。中央や九州からも遠く、海を隔てた島国という地理的な条件が、沖縄の独特な歴史を形成した大きな理由といえるでしょう。日本本土・中国・韓国・東南アジア諸国とほぼ等距離の位置にある沖縄は、これらの国々の政治・経済・文化等の大きな影響を受けながら独自の歴史を形成してきたのです。

なかでも中国との進貢・冊封の関係は、沖縄の歴史を飛躍的に発展させました。一三七二年、中国の洪武帝は、琉球へ使者を派遣して、明国の建国を告げ、入貢を促してきました。これに应运って琉球国中山王察度は、弟の泰期を派遣して進貢品を納めました。ここに初めて中国との進貢貿易、正式の国家間交渉が開始されたのです。以来、明治の初年にいたるまで五〇〇年間に及ぶ親密で長い琉球・中国の交流の時代が続きました。

琉球国は、中国との進貢貿易を軸にして十四世紀末からおよそ二〇〇年にわたり、朝鮮国、シヤム・パタニ（現在のタイ）、マラッカ（現在のマレーシア）、スマトラ・パレンバン・スンダ・ジャワ（以上現在のインドネシア）、安南（現在のベトナム）等の国々と交易をして、東アジアの一大貿易国家へと発展しました。

これらの国々と交わした外交文書は、原文書あるいは写や控などのかたちで外交を専任する久米村の天妃宮に保管されてきました。しかし、長い年月の間に、これらの筆写文書や控文書も破損・散逸のおそれがたため、王府は久米村にその編集を命じました。このようにして一六九七年に『歴代宝案』第一集四九冊が二部作成され、首里王府と久米村にそれぞれ保管されることとなりました。この第一集には、一四二四年から編集時点の一六九七年までの外交文書が収録されています。その後、一六九七年から一八六七年までの琉球・中国間の往復文書は、第二集二〇〇冊・第三集十三冊として編集され、ほかに別巻八冊（内、二集目録四冊）が現存しています。

しかしながら、『歴代宝案』の王府本は、廃藩置県の際に明治政府に引き継がれたといわれていますが所在が不明です。また久米村本は、

一九三三（昭和八）年に旧県立図書館に移管されましたが、去る沖縄戦で散逸しました。

ところが、幸いなことに旧県立図書館に移管された久米村本から影印本と写本が数種作成されて残っています。沖縄県は、平成元（一九八九）年度から、これらの現存する影印本・写本をもとに、『歴代宝案』の編集事業に着手し、平成三（一九九一）年度から刊行を開始しました。この編集事業は、これらの影印本・写本及び関連史料を所蔵する国内外の機関の御協力をえて、諸本を交合・校訂して、原本に近い校訂本を作成し、さらに一般にも普及するため訳注本等を編集することとなっています。

本年度は、沖縄県歴代宝案編集委員会及び沖縄県歴代宝案編集調査委員会の御尽力・御協力をえて校訂本第十一冊を刊行することになりました。校訂を担当された小島晋治先生に感謝申し上げます、刊行のことばといたします。

平成七（一九九五）年三月